

10:1 また私は、もうひとりの強い御使いが、雲に包まれて、天から降りて来るのを見た。その頭上には虹があって、その顔は太陽のようであり、その足は火の柱のようであった。 10:2 その手には開かれた小さな巻き物を持ち、右足は海の上に、左足は地の上に置き、 10:3 獅子がほえるときのように大声で叫んだ。彼が叫んだとき、七つの雷がおのおの声を出した。 10:4 七つの雷が語ったとき、私は書き留めようとした。すると、天から声があつて、「七つの雷が言ったことは封じて、書きしるすな」と言うのを聞いた。 10:5 それから、私の見た海と地との上に立つ御使いは、右手を天に上げて、 10:6 永遠に生き、天とそこにあるもの、地とそこにあるもの、海とそこにあるものを創造された方をさして、誓った。「もはや時が延ばされることはない。 10:7 第七の御使いが吹き鳴らそうとしているラッパの音が響くその日には、神の奥義は、神がご自身のしもべである預言者たちに告げられたとおりに成就する。」 10:8 それから、前に私が天から聞いた声が、また私に話しかけて言った。「さあ行って、海と地との上に立っている御使いの手にある、開かれた巻き物を受け取りなさい。」 10:9 それで、私は御使いのところに行って、「その小さな巻き物を下さい」と言った。すると、彼は言った。「それを取って食べなさい。それはあなたの腹には苦いが、あなたの口には蜜のように甘い。」 10:10 そこで、私は御使いの手からその小さな巻き物を取って食べた。すると、それは口には蜜のように甘かった。それを食べてしまうと、私の腹は苦くなった。 10:11 そのとき、彼らは私に言った。「あなたは、もう一度、もろもろの民族、国民、国語、王たちについて預言しなければならない。」

導入

10 章 1 節から 11 章 14 節は、第六のラッパが鳴らされてから第七のラッパが鳴らされるまでの間の小休止のような役割を果たします。

ここで、神のご臨在の中から降りてきた強い御使いが登場します。

この強い御使いは、小さな巻物を持っていましたが、ヨハネはこの巻物を食べるように命じられます。

それがこの 10 章で記されていることの全容ですが、少し掘り下げていくと、この出来事から私たちの霊性に役立つ教えを見つけることができるでしょう。

1. 強い御使い (10 : 1-7)

まず記されているのは、この御使いが雲に包まれて天から降りてきたということです。

詩篇 104 : 3 には、神が雲をご自分の車にされるとあります。ですから、この御使いは確かに天国からやってきたことがわかります。

では、この強い御使いについての説明を見ていきましょう。

頭上には虹があり、顔は太陽のようで、足は火の柱のようでした。

この説明から、何がわかるでしょう。

a) 虹

エゼキエル 1 : 28 を読むと、エゼキエルが見た神の幻は虹のような神の姿が含まれていました。

エゼキエル 1:28 その方の回りにある輝きのさまは、雨の日の雲の間にある虹のようであり、それは【主】の栄光のように見えた。私はこれを見て、ひれ伏した。そのとき、私は語る者の声を聞いた。

b) 御使いの顔は太陽のように輝いていた。

マタイ 17 : 2 にある変貌の山におけるイエスは、弟子たちの前で姿が変わり、その顔は太陽のように輝いていました。

マタイ 17 : 1-2

17:1 それから六日たって、イエスは、ペテロとヤコブとその兄弟ヨハネだけを連れて、高い山に導いて行かれた。 17:2 そして彼らの目の前で、御姿が変わり、御顔は太陽のように輝き、御衣は光のように白くなった。

c) 御使いの足は火の柱のようだった。

神がご自身の民をエジプトから救い出されたとき、日中は雲の柱として、夜は火の柱として民を導かれました。

ですから、火の柱は、患難の暗闇の中にある神の導きの手を象徴します。

出エジプト 13 : 21-22

13:21 【主】は、昼は、途上の彼らを導くため、雲の柱の中に、夜は、彼らを照らすため、火の柱の中にいて、彼らの前を進まれた。彼らが昼も夜も進んで行くためであった。 13:22 昼はこの雲の柱、夜はこの火の柱が民の前から離れなかった。

この強い御使いが神の御前からやってきたことは明らかです。この御使いの描写が神ご自身を示す内容であることから、この御使いがよみがえって栄光を受けた主イエスであるとする聖書学者もいます。

聖書の状況証拠から考えると、その可能性は十分あります。

2節で、御使いは小さな巻物を手に持っています。この巻物については後ほどお話しします。

御使いは、片方の足を海の上に、もう片方の足を地上に置いていました。

ここから、この御使いがずいぶん大きく力強いことがわかります。海と地上は全世界を意味します。

この御使いは、全世界を完全に掌握しているのです。

この御使いが話すと、それは獅子の雄叫びのようでした。そして、御使いが叫ぶと、7つの雷が鳴り響きました。

聖書では、神の御声を獅子の雄叫びに例えることがよくあります。

ヨエル 3:16 【主】はシオンから叫び、エルサレムから声を出される。天も地も震える。だが、【主】は、その民の避け所、イスラエルの子らのとりでである。

ホセア 11:10 彼らは【主】のあとについて来る。主は獅子のようにほえる。まことに、主がほえると、子らは西から震えながらやって来る。

アモス 3:8 獅子がほえる。だれが恐れなだらう。神である主が語られる。だれが預言しないであらう。

4節で、ヨハネは7つの雷が語った内容を書きとめようとしていました。しかし、それを書き記してはならないと命じられました。

ヨハネはこれまで経験したことをすべて書き留めることができましたが、7つの雷が語ることにについては例外でした。

7つの雷もしくは神の御声は、おそらく詩篇 29 篇と関係があると考えられます。

詩篇 29 篇を読むと、神の声について7つの記述があります。これは興味深い学びです。この神の7つの声について学ぶ時間は今日はありませんが、個人的に学びたいという人たちのために、内容をひとつおき挙げておきましょう。

詩篇 29 篇の神の 7 つの声 :

1. 主の声は、水の上にある。(3 節)
2. 主の声は、力強い。(4 節)
3. 主の声は、威厳がある。(4 節)
4. 主の声は、杉の木を引き裂く。(5 節)
5. 主の声は、火の炎を、ひらめかせる。(7 節)
6. 主の声は、荒野をゆすぶる。(8 節)
7. 主の声は、雌鹿に産みの苦しみをさせる。(9 節)

ヨハネが当時の信徒たちにも現代の私たちにも語り継ぐことのできない啓示をいただいたというのは興味深い事実です。

神からの秘められた啓示がなんだったかを、私たちはあれこれ推測するべきではありません。

ここでわかっているのは、人にその内容を知らせることができない啓示を神から受けたのは、ヨハネが初めてではないということです。

コリント第二 12 : 1-6 を読みましょう。

コリント第二 12 : 1-6

12:1 無益なことですが、誇るのもやむをえないことです。私は主の幻と啓示のことを話しましょう。 12:2 私はキリストにあるひとりの人を知っています。この人は十四年前に——肉体のままであったか、私は知りません。肉体を離れてであったか、それも知りません。神はご存じです、——第三の天にまで引き上げられました。 12:3 私はこの人が、——それが肉体のままであったか、肉体を離れてであったかは知りません。神はご存じです、—— 12:4 パラダイスに引き上げられて、人間には語ることを許されていない、口に出すことのできないことばを聞いたことを知っています。 12:5 このような人について私は誇るのです。しかし、私自身については、自分の弱さ以外には誇りません。 12:6 たとい私が誇りたいと思ったとしても、愚か者にはなりません。真実のことを話すのだからです。しかし、誇ることは控えましょう。私について見ることに、私から聞くこと以上に、人が私を過大に評価するといけないからです。

パウロは、人に語ることでできない神の幻や啓示を経験しました。未来についての特定の啓示や経験から神が私たちを守られる理由があるのです。それは、私たちが未来についてあまりにも心配しすぎるからかもしれません。将来を心配し過ぎると、今を楽しめなくなるからです。もし、今日のお昼ご飯に食べるお好み焼で食中毒になるとわかっていたら、おいしいお好み焼もおいしくなくなります。こんなふうに例に挙げただけで、今日の昼ごはんはお好み焼を避けようと思う人もいるかもしれません。

イエスはマタイ 6 : 34 でおっしゃいました。「だから、あすのための心配は無用です。あすのことはあすが心配します。労苦はその日その日に、十分あります。」

私たちが知ることを神が望まれない事柄があるということです。神は、私たちのためにその内容を明かされないのです。

5-7 節には、御使いが誓って宣言した内容が記されています。この宣言は、遅延なく神の奥義が成就するというものでした。ここで忘れてはならないのは、これが反キリストの現れる大患難時代の最中だということです。反キリストについて知るために、テサロニケ第二 2 章を読みましょう。

テサロニケ第二 2 : 1-12

2:1 さて兄弟たちよ。私たちの主イエス・キリストが再び来られることと、私たちが主のみもとに集められることに関して、あなたがたにお願いすることがあります。 2:2 霊によってでも、あるいはことばによってでも、あるいは私たちから出たかのような手紙によってでも、主の日がすでに来たかのように言われるのを聞いて、すぐに落ち着きを失ったり、心を騒がせたりしないでください。 2:3 だれにも、どのようにも、だまされないようにしなさい。なぜなら、まず背教が起こり、不法の人、すなわち滅びの子が現れなければ、主の日は来ないからです。 2:4 彼は、すべて神と呼ばれるもの、また礼拝されるものに反抗し、その上に自分を高く上げ、神の宮の中に座を設け、自分こそ神であると宣言します。 2:5 私がまだあなたがたのところに行ったとき、これらのことをよく話しておいたのを思い出しませんか。 2:6 あなたがたが知っているとおり、彼がその定められた時に現れるようにと、いま引き止めているものがあるのです。 2:7 不法の秘密はすでに働いています。しかし今は引き止める者があって、自分を取り除かれる時まで引き止めているのです。 2:8 その時になると、不法の人が現れますが、主は御口の息をもって彼を殺し、来臨の輝きをもって滅ぼしてしまわれます。 2:9 不法の人の到来は、サタン働きによるのであって、あらゆる偽りの力、しるし、不思議がそれに伴い、 2:10 また、滅びる人たちに対するあらゆる悪の欺きが行われます。なぜなら、彼らは救われるために真理への愛を受け入れなかったからです。 2:11 それゆえ神は、彼らが偽りを信じるように、惑わす力を送り込まれます。 2:12 それは、真理を信じないで、悪を喜んでいたすべての者が、さばかれるためです。

ここに記されている内容はすべて、第七の御使いのラッパが吹きならされたときに起こります。では、少し先になりますが、黙示録 11 章 15-19 節を読みましょう。

黙示録 11 : 15-19

11:15 第七の御使いがラッパを吹き鳴らした。すると、天に大きな声々が起こって言った。「この世の国は私たちの主およびそのキリストのものとなった。主は永遠に支配される。」 11:16 それから、神の御前で自分たちの座に着いている二十四人の長老たちも、地にひれ伏し、神を礼拝して、 11:17 言った。「万物の支配者、今いまし、昔います神である主。あなたが、その偉大な力を働かせて、王となられたことを感謝します。 11:18 諸国の民は怒りました。しかし、あなたの御怒りの日が来ました。死者のさばかれる時、あなたのしもべである預言者たち、聖徒たち、また小さい者も大きい者もすべてあなたの御名を恐れかしこむ者たちに報いの与えられる時、地を滅ぼす者どもの滅ぼされる時です。」 11:19 それから、天にある、神の神殿が開かれた。神殿の中に、契約の箱が見えた。また、いなずま、声、雷鳴、地震が起こり、大きな雹が降った。

大患難時代の後半には、神のすべてのご計画が明らかになります。神はついに悪と対決なさり、神のご計画にそって正義がなされます。その時点までは悪が勝利しているように見えても、最終的には神がすべての悪に勝利され、神と神のご計画に反対するすべてのものを打ち負かされます。黙示録のすばらしいところは、最終的に神が勝利し、すべての悪が滅ぼされることです。では強い御使いの話から、ヨハネと巻物に話題を進めましょう。

2. ヨハネが小さな巻物を食べる。(10 : 8-11)

2節で、御使いは右手に小さな巻物を持っていました。御使いはヨハネにこの巻物を御使いの手から受け取るように言います。そして、この巻物を食べなさいと言います。そのとき、この巻物は口には蜜のように甘い、一旦食べると腹には苦いとヨハネは告げられます。この箇所には、注目すべき点がいくつかあります。まず、ヨハネはこの巻物を受け取るように2度命じられます。8節には、「さあ行って、…巻き物を受け取りなさい。」とあります。9節では、「それを取って食べなさい。」と命じられます。神の啓示が記された小さな巻物は、ヨハネの口に無理やり入れられたのではありません。ヨハネが自分の意志で受け取らなければなりません。それは、私たちひとりひとり同じことです。神のみことばが告げ知らされ、教えられると、私たちはひとりひとり自分でそれを心に受け入れるか決めなければなりません。神のみことばはすべての人に提供されますが、神は誰にもそれを強制なさいません。

次に、ヨハネのこの経験は、エゼキエル 3 : 1-3 に記されたエゼキエルの経験に非常に似ています。

エゼキエル 3 : 1-3

3:1 その方は私に仰せられた。「人の子よ。あなたの前にあるものを食べよ。この巻き物を食べ、行って、イスラエルの家に告げよ。」 3:2 そこで、私が口をあけると、その方は私にその巻き物を食べさせ、 3:3 そして仰せられた。「人の子よ。わたしがあなたに与えるこの巻き物で腹ごしらえをし、あなたの腹を満たせ。」そこで、私はそれを食べた。すると、それは私の口の中で蜜のように甘かった。

黙示録とエゼキエル書で描かれているのは同じ事柄です。神のみことばを携える者は神のメッセージを自分自身の人生に取り入れなければなりません。つまり、その人の一部となる必要があるのです。神のみことばが甘いという教えは、聖書の随所に登場します。

詩篇 19 : 7-10

19:7 【主】のみおしえは完全で、たましいを生き返らせ、【主】のあかしは確かで、わきまのない者を賢くする。 19:8 【主】の戒めは正しくて、人の心を喜ばせ、【主】の仰せはきよくて、人の目を明るくする。 19:9 【主】への恐れはきよく、とこ

しえまでも変わらない。【主】のさばきはまことであり、ことごとく正しい。 19:10
それらは、金よりも、多くの純金よりも好ましい。蜜よりも、蜜蜂の巣のしたたりよりも甘い。

詩篇 119:103 あなたのみにことばは、私の上あごに、なんと甘いことでしょう。蜜よりも私の口に甘いのです。

ここで、興味深いユダヤ人の教育上の慣習の背景をご紹介します。
昔、ユダヤ人の男の子がヘブル語のアルファベットを習うとき、小麦とはちみつを混ぜて作った板に文字が書かれていました。
男の子は、その文字がなんとという文字でどう発音するかを教わります。
その後、先生はそれぞれの文字を指して男の子に、「これは何の文字でどう発音しますか」と質問します。
男の子にとって、神のみにことばは蜜のようでした。というのも、実際に文字が記された板がはちみつと小麦でできていたからです。

この個所から、ヨハネの体験とエゼキエルの体験が多少違ったことがわかります。
ヨハネには、この小さな巻物は甘いと同時に苦いものでした。
ヨハネがこの巻物を食べると、甘くておいしかったのですが、お腹に入ると、それは苦くなりました。

ヨハネの伝えたかったことは次のとおりです。
神がしもべに与えるメッセージは、甘くも苦くもあります。
神の使者として選ばれることはすばらしい光栄ですから、甘いと言えます。
しかし、メッセージ自体はあまりよくない知らせをあらかじめ伝える内容かもしれないので、苦いと言えます。
ヨハネにとって、天の奥義を見せていただけたことはこの上ない特権でしたが、同時に、最後にイエスが勝利するとわかっているにもかかわらず、患難の時代をあらかじめ知るのとはつらいことでした。

注解者ウォルブードは次のように語ります。
「ヨハネにとって神のみにことばは約束であり、恵みであり、神の愛の啓示である。つまり、神のみにことばは甘いのである。しかし、神のみにことばにあるのは恵みの約束だけではない。黙示録自体が十分に描いているとおり、神のみにことばは神の裁きも啓示する。神の裁きは、邪悪な世に対する神の御怒りとして地上に注がれるのである。」

適用

私たちも、聞いてくれる人たちに神のみにことばを告げ知らせなければなりません。けれども、私たちが伝える福音も甘くもあり苦くもあります。
神の愛と私たちの罪のためにイエス・キリストが払われた犠牲を伝える一方で、神の愛と赦しを拒む人々に対する神の裁きも伝えなければならないからです。
私たちクリスチャンは、福音のメッセージがある理由を隠してはいけません。
私たちが伝える福音は、神の怒りと裁きからの救いを伝える知らせです。
自分が危険にさらされていることを知れば、人は救いを求めるでしょう。しかし、今日の多くの人々は、危機に瀕しているという自覚がないので、自らの罪の罰から救われるために神を求めようとはしません。
今日、皆さんが神の愛と神の御怒りの両方をきちんと理解してくださることを願います。
私たちはその両方を知って、伝えなければならないのです。